

主 題：最も尊い贈り物 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章3－4節

「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」（ローマ8：1）、罪のさばきを受けることは絶対にないとパウロは救われたクリスチャンのことをこのように言いました。

「さばかれることがない」とは何というすばらしい響きでしょう。私たちイエス・キリストを信じる信仰者に何という確信と喜びを与える神の約束でしょう。パウロは8章の最初でそのように言いました。

☆主イエスによって与えられるすばらしい救い

A. 私たちを生まれ変わらせる 1節

罪赦されている人たちはだれ一人として絶対に永遠に罪のさばきを受けることはない、パウロは私たちの救いがどんなにすばらしいものであるかということ、この8章を通して私たちに教えてくれています。そのことを私たちはもう見て来ました。救いとは信じる一人ひとりを新しく生まれ変わらせるとパウロは言いました。人は新しく生まれ変わります。私たちはこの人生をやり直すことが出来る、主にあって新しい人生を始めることが出来るのです。救いは罪を完全に赦すだけでなく、その人に新しい歩みをもたらすものだと、そのことをパウロは最初に私たちに教えたのです。

B. 私たちはさばかれない 1－2節

そして、二つ目に私たちが見たことは、救いは私たちをそのさばきから永遠に解放するということでした。つまり、救われている者たち、クリスチャンはさばきに会うことがないとパウロは教えたのです。救われた人はさばきに会うことがないのです。なぜなら、救われた一人ひとり神と特別な関係に入れられたからです。私たちはイエス・キリストを信じることによって、サタンの子どもであったのに神の子どもとされたのです。私たちは生まれながらにみなサタンの子どもとして、サタンを喜ばせ、サタンに従って来ましたが、そこから救い出されて神の子とされたのです。だから、救われた者はさばきを受けないのです。また同時に、救われた一人一人はキリストのからだの一部であると聖書は教えていました。私たちは神と特別な関係に入れられているからさばきに会わないのです。

同時に、2節では、私たちが解放されたからさばきに会わないというパウロの教えを見て来ました。私たちにいのちを与える、いのちの源である聖霊なる神は、信じる一人ひとりをその束縛してきた罪の力から、永遠のさばきから解放してくださった、罪ののろいから解放して下さり、そして、自由を与えてくださったのです。神はこのようすばらしい祝福を信じる一人ひとりに与えてくださるのです。パウロは言います。「救いはすばらしいものだ。これ以上すばらしいものは存在しない。」と。

そして、パウロは言います。「このすばらしい救い、これは神から信じる一人ひとりに対するすばらしい贈り物だ。」と。かつての私たち人間は例外なくみな生ま

れながらに創造主なる真の神に逆らい続けています。その方を受け入れようもしないし、その方を愛して従おうもしないし、その方の教えに従ってその方を喜ばせようとしません。私たちは創造主なる神を全く無視して、自分勝手に自分の好きなように生きて、好きなように人生を過ごそうと生きて来ました。ですから、その神によって、自らの罪がさばかれて、そして、永遠に絶えることのない未曾有の苦しみを受けて当然の私たち、神に逆らい続けたのですから、神に背き続けたのですから、当然、神からさばきを受けてしかるべき私たちに対して、神が為してくださったことは、救いを備えてくださり、そして、イエス・キリストを信じる者に神が約束されたすばらしい救いを間違いなく与えてくださることでした。

イエス・キリストを信じて救われた一人ひとり、あなたに神が約束してくださったそのすばらしい祝福を思い出してください、クリスチャンの皆さん。私たちは年々年を重ね、肉体的な死を迎える日が来るかもしれません。確実に言えることは一日一日その日に近づいているということです。でも、私たちはそれで終わりません。すべての人間は死んで終わらない、その後みな神に出会うのです。神の前に立つのです。罪が赦されている者は永遠のいのちをいただき、そうでない者は永遠のさばきに至ると、そのように聖書は教え、そのように警告しています。私たちにどのような約束が待っているのか、私たちがこの地上の生活が終わったときに神が約束してくださっていることは、私たちが愛して私たちが救ってくださった主なる神と、天国で永遠をともに過ごす、それが聖書が私たちに約束してくれていること、救われたあなたに保証していることです。ですから、私たち救われた一人ひとりはそのことを喜びながらその日を待望しながら今日を生きるのです。

また、永遠のことだけではありません。今日というこの日を私たちは喜びをもって感謝をもって生きることが出来るのです。神は私たち一人ひとりにすばらしい特別の祝福を与えてくださっています。私たちはそれに気付かなければいけません。私たちは何事も当たり前だと思ってしまうのですが、私たちがいただいているもの、こうして生きていくこと、こうして食事をいただけること、動けること、私たちは神が与えてくださっている恵みにもっともっと感謝することが必要です。そして、先ほどから話しているように、この救いは私たちが今日だけでなく永遠に祝福の中を歩み続けて行くというすばらしいものです。感謝なものです。パウロは救いのすばらしさを教えた後、私たちはその救いをどのようにして手に入れて行くのか、そのことに話が移って行くのです。

C. 救いは神の恵み 3-4節

今日、私たちはいっしょに8章3節のみことばを見ようとしています。まずここで、パウロは実際に8：3-4で「救いは神の恵みだ」ということを教えようとしています。今日は3節を見ます。

1. 自分で自分を救えない

この救いに関して、パウロが「恵みである」と言うのは、私たち人間は例外なく自分で自分を救えないということです。あなたがどれ程努力しても、頑張っても、あなた自身の力で救いを得ることはないと言うのです。3節「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいまし

た。」と記しています。この部分をギリシャ語から直訳すると「律法では出来ないために、そして、肉によって弱くなっていたため」となります。覚えていただきたいことは、ここでパウロが言っていることは「律法は人を救うことが絶対にできない」ということです。「無力だ。」と言ったのです。この「できなくなっている」というのは「不可能」という意味です。絶対に無理だということなのです。

パウロがこのローマ書で繰り返し私たちに言っているように、確かに、律法はすばらしいものです。なぜなら、律法は主なる神のみこころを私たちに教えてくれるからです。神が私たち人間にいったい何を望んでいるのか、そのことを明らかにしているのが律法です。ですから、神のみこころを知るために律法はすばらしいものなのです。同時に、この律法は私たちが主のみこころから逸脱していることを示します。というのは、神はこのように生きなさいと教えているのに、私たちはそれから外れているからです。そのことを知るためにも律法は非常に大切なものです。神の要求を見た時に、その要求から自分は外れている、神がこのように生きなさいと言われるその教え命令に対して私は外れている、そのことを知るためにも律法は非常に大切であり、すばらしいものなのです。自分は神の望んでおられる姿から外れているということを知ることによって、私には救いが必要だということを律法は私たちに示してくれるのです。確かに、律法はそこまでできるのです。神の前に私が間違っていること、神の前に私は罪を犯していること、そして、私はその罪が赦される必要があるということを知って教えるのですが、そこまでだと言うのです。

律法は私たちを救うことが出来るのでしょうか？「出来ない、不可能だ。」とパウロは言います。私たちはもうすでに学んだところですが、パウロはこのローマ人への手紙3：20で「**なぜなら、律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。**」と言いました。律法は罪の赦しを与えることが出来ないだけでなく、律法によって罪の意識が生じると言うのです。神の要求、神が私たちに望んでおられること、神の命令を聞くときに、私たちはそれに逆らっているということが明らかになるのです。なぜ、律法は人を救うことができないのでしょうか？こんなにすばらしい律法が、なぜ、私たちを救うことができないのでしょうか？その理由をパウロはこのように説明しています。

◎律法が人を救えない理由

1) 肉によって無力になったため

3節に「**肉によって無力になったため、**」と記されています。これが律法が私たちを救えない理由です。つまり、パウロが言っていることは、律法はすばらしいものだが、律法によって救いを得ることが出来ない理由は、律法にあるのではなくて、私たちに原因があるということなのです。すなわち、「**肉によって無力になった**」と言うのです。この「**無力になった**」ということは「弱くなった」という意味です。しかも、この動詞の時制を見ると、継続して弱い状態にあり続けるということなのです。つまり、神が望んでいることを聞いても、皆さんどうですか？私たちは罪深い存在ですから、それを守ることが全く出来ないのです。何度も何度もやってみようと努力するけれど失敗の連続です。だから、パウロが言ったのです。問題は律

法にあるのではない、私にある、私たちの肉に原因があると。ルターはこのように言います。「不可能性というのは、律法を成就するには弱く、無力になっている我々のうちにその原因がある。」と。

要するに、神が命じていることを私たちは残念ながら100%実践出来ないのです。だから、律法によっては救われれないと言うのです。というのは、ガラテヤ3：10には「**というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**とあるからです。もし、律法によって救いを得ようとするのなら条件があると言うのです。すべての点で完璧にその律法を守り行ないなさいという条件です。それが出来ない以上、あなたは律法によって救いを得ることはないと言っているのです。このことを疑うのなら、皆さんぜひ聖書が命じるすべてのことを実践しようとしてください。私たちはすぐに気付きます。自分は弱い者で悲しいことに神が望んでいることを実践出来ないと...

パウロはなぜ、ここで再び、私たちは律法を守ることが出来ない不完全な者であり、律法を守ることによって救いを得ることは絶対にないと教えたのでしょうか？それはこの当時、このローマにおいて、そのように信じている人がいたからです。人々は律法を守り行なうことによって救いを得ることが出来ると信じて、そのように歩んでいたのです。

ルターはこのように言っています。「パウロは律法に対する彼らの虚しい信頼と認識に反論して、彼らが推測しているようなこと、すなわち、罪をとり除き義を獲得することを果たすのは、律法には不可能であるということを教えたかった。」と。つまり、良いことをして行くなら、徳を積み、きっと私は救われて天国に行くことが出来る、結果的に、罪の赦しを得ることができると考えている人たちがいたのです。行ないによって、自分の良い行ないによって救いを得ることが出来る。ですから、それに対してパウロは真っ向から「絶対にそんなことはない。」と言うのです。ですから皆さん、宗教に救いがないというのはそういうことなのです。慰めはあるでしょう、すばらしい教えはあるでしょう。しかし、救いはないのです。それはどうしてでしょう？このようなことを行ないなさい、このような行ないを継続しなさいと、そのように命じられてそれを一生懸命守ろうとしても、悲しいことに、私たちは行動において心においてすべての点において、完全に聖い正しい者になることなど不可能だからです。

皆さんも何度もそのようなことを経験されたはずです。悪い考えを捨てよう、正しく生きようと、どれだけ続きますか？私たちは心の中ではっきり確信を持っているのです。どんなに頑張っても私の心のその汚れた部分をどうすることも出来ない。私たちはいろいろな教えを受けて来ました。こうすれば自分を変えることが出来ると、私たちは努力し頑張って自分の行動を変えることが少しは出来るかもしれませんが、でも、問題は心です。主イエス・キリストだけが私の心を変えてくださるのです。なぜなら、神は私たちがいかに不完全であるかということを知っておられるからです。しかも、私たちの行動も、私たちの心もどれ程汚れているのかを知っ

ておられるのです。私たちの汚れ、弱さを知っておられるのです。私たちにどれ程このようにしなさいと命じて、私たちは守れない者であるということを知っておられるのです。そのことがこの8：3に書かれているのです。

「**肉によって無力になった**」、私たちが罪深い者で神の命令を完璧に守れない、だから、この律法によって救われることがない、行ないによって救われることはないと見ました。なぜなら、すべての点で完全な、完全に正しい行ないをずっと継続している人は存在していないからです。だから、このように続くのです。「**律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。**」と。ですから、私たち人間に出来ないこと、つまり、自分で自分を救うことは私たちに出来ないから、神が私たちを救おうとしてくれたと言うのです。神が私たち人間のために救いを備えてくださったのです。ですから、救いは私たちが一生懸命努力して自分の力で獲得出来るものではないのです。自分を満足させたとしても、神が要求しておられる聖い正しい完全な者になり得ないからです。でも、そんな不完全な私たちのために神はすばらしい救いを備えてくださったのです。「**神がしてくださいました。**」と、皆さん、感謝なことに創造主なる真の神は、あなたのためにすばらしい救いを備えてくれたのです。神は何をされたのでしょうか？そのことがこの3節に継続して記されています。

2. 救いは神のみわざ 3節

1) イエスの派遣：イエスの誕生

神はあなたを救うためにイエスをこの世に派遣したと言います。イエス・キリストの誕生のことです。3節「**神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、**」と、神はご自分の御子をお遣わしになったとパウロは言います。

(1) 神であるイエス

先ず、見ておきたいことは「**神はご自分の御子を**」とはどういう意味なのかということです。パウロが言いたかったことは「神ご自身が人間に出来ないことをしてくれた。神ご自身が私たちのために救いを備えてくれた。それは御子イエス・キリストを地上に送ったことだ。」です。つまり、この方がいったいだれなのかということをもっと最初と言うのです。送られて来た、遣わされて来たイエスは神だと言うのです。神が「**ご自分の御子**」と言っています。この「神」とは父なる神を指しています。そして、「御子」とは「子なる神イエス・キリスト」を指しています。では、神は二人いるのでしょうか？違います。これが聖書の教える唯一真の神です。永遠の昔からこのように、ここには父なる神と子なる神だけが記されていますが、聖霊なる神を加えて、三つの異なった人格をもつ唯一の神が永遠から永遠に存在しているのです。これが聖書の教える神なのです。

父なる神、子なる神イエス・キリスト、聖霊なる神、すべて同格なのです。どれが偉くてどれが偉くないというのではなく、みな同格の一人の神が存在すると聖書は教えるのです。ですから、この父なる神と子なる神の間には特別な関係が存在するのです。どのような関係でしょう？「**ご自分の御子を**」と「**ご自分の**」という代名詞を加えることによって、父なる神とイエス・キリストとの間には特別な密

接な関係が存在しているということを強調するのです。神はこのような表現を私たちにに対してはお使いになりません。特別な存在、特別な関係が父なる神と子なる神の間にはあるのです。ですから、最初にパウロが私たちに教えることは、父なる神が子なる神イエス・キリストをこの地上に送ったということです。

(2) 人として遣わされた神

このイエスは「人としてこの世に遣わされた神」だと言います。先ほども話しましたが「神がお遣わしになった」と記されていました。つまり、人となったということです。イエスは人となった神だと言うのです。そのために私たちはこのようにクリスマスをお祝いするのです。神が人としてこの世に来てくださったそのことを記念して、この日を2000年以上祝い続けているのです。

イエスは父なる神によって遣わされた神であり、人となられた神なのです。ですから、地上におられたときにイエス・キリストは繰り返して「わたしは父から遣わされて来た。」と言い、また、「わたしは父なる神と等しい存在だ。」ということの人々に語り続けました。たとえば、ヨハネの福音書12：45ではこのようなことを言われています。「**また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです。**」と非常に興味深いことを話されています。「わたしを見る者は父なる神を見る」と言ったのです。わたしと父なる神は同じだということです。もし、神がどのようなお方か知りたければ「わたしを見なさい」と言ったのです。もし、私たちがこのように言うなら、神に対する冒瀆です。しかし、イエス・キリストは人となられた神ゆえに、このように言われてご自分が神であることを明らかにされたのです。また、同じ12：49には「**わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。**」とあります。父なる神がわたしを遣わしたと言うのです。ですから、神である方が人となってこの世に来てくださった、イエスは人となられた神なのです。

もう一つ面白いことは、この「人となられた神」は100%人間だったのですが、彼には罪がなかったということです。彼には罪がなかったのです。なぜ、そのように言えるのでしょうか？もう一度8章3節を見てください。「**神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、**」とこのような説明が加えられています。ここに「罪深い肉と」とありますが、私たちはイエス・キリストも私たちと同じように罪深い肉、つまり、これは私たちのからだのことですが、私たち人間は罪をもっているから、イエス・キリストも私たちと同じように、罪ある者として罪を犯す者としてこの世にお生まれになったのかと思えるのですが、パウロはそのことを言いたかったのではありません。そのことを私たちは見て行くのですが、パウロはここで「**罪深い肉**」という表現を使っています。実は、このような表現は新約聖書のどこにも出て来ません。ここだけです。イエスが人となって来たということにはいろいろな表現が使われているのですが、このような表現は使われていないのです。

たとえば、ローマ1：3ではイエスが人となって来たということをこのように記しています。「**御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫とし**

て生まれ、」と。また、ピリピ2：7では「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」とイエスが人となってこの世に来られたことをこのように表現しているのです。また、1テモテ3：16を見ると「確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」とあります。そして、1ヨハネ4：2には「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。」とあります。

もう一度、今日のテキストを見てください。聖書の様々な箇所を見ると、イエス・キリストが人となってこの世に来たということに関して、今見て来たように「肉によれば」、「人間と同じようになられた」、「肉において現われ」、「人となって来た」という説明で「キリストが人となって来た」ことを説明しているのですが、ところが、このローマ人への手紙8：3では「罪深い肉」ということばを使っているのです。私たちはパウロがなぜこのような表現をここで使ったのかを考えなければいけません。先ほども少し見ましたが、パウロが言いたいことは、実は、それが私たち人間だからです。そして、イエス・キリストが来られた目的はこの「罪の赦し」と関係しているからです。パウロは敢えてここで、人間というのはすべてにおいてみな例外なく「罪深い肉」をもって生まれていると言うのです。だから、悲しいことに罪を犯し続けるのです。罪を止めることが出来ないのです。私たちは罪深い肉をもって生まれ、罪深い肉をもって生きているのです。ですから、パウロはここで私たち人間はこのように罪深い者であり、それゆえに、罪の赦しが必要だということを強調したかったのです。

(3) 罪のない人

でも、これだけを見ると、イエスも私たちと同じように罪を犯す者として生まれて来たのか？とそのような疑問が出て来ます。その疑問に対してパウロは絶対にそのようなことはないということを強調するために加えたのが「同じような形で」という名詞です。このことばは「姿、その似た姿」という意味をもったことばです。そして、このことばは新約聖書の中に6回して出て来ません。どのような意味でしょうか？パウロがここで使った「同じような形」とは、これはあくまで容姿、外見に限ったことです。神学事典を見ると、このことばに関してこのような説明があります。シュナイダーは「このことばは二つのことを指している。第一に容姿において同じような形であること、第二に本質において異なるということ」と、実は、このことばがもっている意味はそういうことなのです。ここでパウロが言いたかったことは、イエス・キリストは罪をもっている私たちと同じような姿、容姿でこの世にお生まれになった。つまり、完全に人であったということです。完全に人であったから、私たちと同じように疲れを覚えるし、悲しみを覚えるし、空腹を感じるし、私たちと全く同じで、何ら変わらない人間だったのです。

しかし、それはあくまで容姿においてであって、本質の部分においては違うと言うのです。先ほど、見て来ました。人となってこの世にお生まれになったイエスは、永遠から永遠まで神です。人となって来られた神です。ですから、イエスだけ

が永遠に神であり、そして、本当の完全な人間としてこの世に来られたのです。彼は人であり神なのです。だから、本質の部分で私たちとは違うのです。だから、イエスは罪を犯すことがなかったのです。ヘブル人への手紙でイエスのこのことに関して著者はこのように言っています。7：26「また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。」「大祭司」とはだれのことでしょう？イエスのことです。イエス・キリストは「きよく、悪も汚れもなく、罪人から離れた」罪と完全に無縁のお方だと言うのです。ですから、人としてこの世に来られたイエス・キリストは、確かに、私たちと同じように罪深い肉を容姿においてもっておられたけれども、彼は罪とは全く無縁のきよい正しい存在であったと言うのです。同じように、ヘブル4：15では「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」、罪は犯されなかった、イエスには一つの罪もなかったと言います。これはとても大切なことです。救い主として私たち人間の罪を救うため赦すためには彼に罪があつてはならないのです。

イエスのうちに罪がなかったということは、弟子たちだけが証したことでありませんでした。イエスの裁判の様子を見てみましょう。

◎イエスの裁判の様子 ヨハネ19章

ヨハネの福音書19章にピラトがイエスを捕らえてむち打ちにしたところが記されています。そして、イエスの頭にいばらの冠をかぶせ、紫色の着物を着せて群衆の前に連れ出した様子、それがこの19章に記されているのです。ピラトは群衆に向かって言います。19：4「ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということ、あなたがたに知らせるためです。」、キリストの弟子でもなかったピラトがこのように言うのです。「イエスのうちには何の罪もなかった。」と。彼は裁判官でした。人々はイエスを十字架につけて殺せ、処刑しろと言っています。そのことに関して彼が証言したことは「彼のうちには罪がない。」ということです。6節を見てください。「祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ。」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」、彼は繰り返しイエスのうちに罪がないと証言しました。おかしいことはその後です。7節にユダヤ人たちが彼に答えています。イエスを殺したいと憎悪感に満ちあふれていた彼らはこのように言うのです。「私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。」、彼らはイエスには死刑が相応しい、十字架で処刑されることが相応しいと言ったのです。その根拠は何でしょう？「この人は自分を神の子としたのですから、」と言います。彼らはイエスのメッセージをよく理解していたのです。先ほど私たちが見たように、イエスは地上におられときにご自分が神だということを何度も人々の前で明らかにさ

れました。奇蹟によってもそのことを証明されました。彼らはそのメッセージを聞いてそれがよく分かったのです。だから、「このイエス・キリストは死罪に当たります。なぜなら、彼は神を冒瀆したから、自分を神として神を冒瀆しているから。」と言うのです。

もちろん、私たち人間が「私が神だ」と言うならそれは神に対する冒瀆です。なぜなら、私たちは神ではないからです。しかし、このイエスは人としてこの世に来られた永遠から永遠に存在する真の神だったのです。彼はそのことを「わたしは人としてこの世に来た神です。」と言われたのです。それを聞いた人々は「これは神に対する冒瀆だ」と言ったのです。

もう一つ覚えていただきたいことは、彼らはこれ以外の理由を上げることができなかつたのです。彼らがもしイエス・キリストの様々な罪を知っていたら、あれもこれもと言えたのです。でも、彼らは何一つ上げることができないのです。だから、彼らが言えた唯一のことは「このイエスは自分を神とした、だから、十字架で処刑されてしかるべきだ。」ということです。イエスは何の罪も犯していないからです。だれが調べても、イエスの弟子たちが調べようとも、イエスの敵が調べようとも、イエスのうちには罪がなかつたのです。イエスのそのきよさは、イエスの弟子だけでなく、本人だけでなく、イエスを殺そうと企てていた者たちもそのことを証明するのです。

父なる神がイエスをこの世に遣わしたということを見ました。そして、この世に来られた、この世に生まれたイエスがだれなのかということを見ました。

2) イエスの派遣の目的

パウロは、なぜイエス・キリストがこの世にお生まれになったのか、その目的について3節で教えています。3節の最後に「**肉において罪を処罰されたのです。**」とあります。これがイエス・キリストがお生まれになった、もっと正確に言えば、父なる神がイエス・キリストをこの世に遣わされた目的です。イエス・キリストがこの世に人となってお生まれになった目的は「**肉において罪を処罰**」するためだったのです。この「**処罰された**」ということばは「有罪の判決を受ける」だけではなくて「刑を執行される」とそこまで含まれているのです。イエスは何をしたのでしょうか？イエスはあなたが受けていた罪の有罪判決を肩代わりされた。それだけでなく、あなたが受けるべきその刑の執行、そのさばきまでも彼が代わって受けてくれたと言っているのです。有罪判決を受ける人は神の前に罪を犯している人です。有罪判決を受けたからそこにさばきがあるのです。あなたの有罪判決を無実の彼が引き受けてくださり、有罪判決を受けたゆえに刑が執行されるあなたに代わって、彼がその刑を自分の身に受けてくれたのです。主イエス・キリストが来たのはそのためです。

どのようにしてそれを為されたのでしょうか？もう一つだけ見ていただきたいのですが、8章3節にある「罪のために」ということばは、聖書の70人訳、つまり、ヘブライ語をギリシャ語に翻訳した70人訳ですが、その中には54回出て来ますが、その中の44回は「罪のささげ物」として使われているのです。つまり、ここでパウロが言っていることは、イエス・キリストがこの世に遣わされて来たのは、

罪のささげ物となるためだということです。そして、「**肉において罪を処罰された**」というのは、ご自分のからだをもって、つまり、あの十字架においてイエス・キリストは罪を処罰されたと言っているのです。

整理するとこういうことです。父なる神は子なる神イエス・キリストをこの地上に人として遣わされました。それはあなたに代わって、あなたの罰を受け、そして、有罪判決を受けて永遠の滅びへと向かっていたあなたに代わって、彼がその罰を受けてくれたのです。十字架にかかってイエスが死なれたのは、あなたをその罪から救い出すためだったのです。この身代わりによって信じる一人ひとりの罪が赦されるのです。

皆さん、イエス・キリストはあなたを罪から救うために来てくれたのです。そして、それだけでなく、あなたの身代わりとなってあなたが架かるべき十字架にかかり、彼が代わりにあなたのさばきを受けてくれたのです。ご自分の肉において、あなたの罪を完全に処理してくださったのです。このすべての行為を起さされたのはいったいだれでしょう？この3節で、御子を罪のささげ物として遣わし、そして、私たちの罪の身代わりに十字架で殺し、あなたが受けなければならない罪のさばきを彼に負わせたのはいったいだれだったのでしょうか？それは神です。ですから、この文章の主語は神です。私たちは自分で自分に救いをもたらすことができないから、自分で自分を救うことができないから、神は代わりにしてくれたのです。どのような方法でしょう？あなたのために罪の贖い主をこの世に送ってくれたのです。

このみことばは私たちに神がどれ程罪を憎んでいるのかを教えます。だから、罪に対しては見逃すのではなくさばきがあるのです。皆さん、どのような罪でも神はご存じです。あなたのすべてをご存じである神は、あなた自身も、あなたに罪があることも知っておられます。そして、神が警告することは、罪に関しては必ずそれに相応しい報いがあなたに返ってくる、罪のさばきがあること、永遠のさばきがあることです。しかし同時に、あなたがそれほど罪深い存在だということを知っているながら、今この時点で、神はさばきでなく何とあなたのためにすばらしい救いを備えてくれていると言うのです。

主イエス・キリストはお生まれになったのです。人としてこの世に来てくださったのです。目的をもって来られたのです。罪のささげ物として、ご自分のいのちをあなたに代わって十字架で捨てることによって、信じるあなたに永遠の完全な罪の赦し救いを与えるために...。神はここまであなたのことを愛してくださっているのです。滅びに向かっているあなたを神は救わんとし、救い主を送り、救いの手を差し延べてくださったのです。でも悲しいことに、この世はその救い主を拒み続けている人たちであふれているのです。こんなにすばらしい救いを成し遂げてくださりあなたに救いを与えると言われる神を拒み続けている人々で、この世はあふれているのです。あなたはその一人でしょうか？あなたは未だこの救いを拒み続けて、この神に背を向き続けて、そして、今この瞬間も、神の救いを無視して永遠の滅びに向かっている、それがあなたでしょうか？ローマ5：8「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**」

イエス・キリストが誕生したときに天使はこんなことを告げました。ルカの福音書2：10-11「御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」、救い主は来たのです。あなたをその罪から解放し完全な救いを与えるために。あなたはこの救いをいただいていますか？罪から解放されて生まれ変わっていますか？今日死んでも私は永遠の天国にあつて神とともに永遠を過ごせると、その確信をもって歩んでいますか？その喜びをもって今日生きていますか？主イエス・キリストは、あなたのために来たのです。父なる神は喜んでご自分の愛するひとり子を犠牲にして、あなたに救いを与えようとされました。逆らうことを止めることです。神に対して罪に罪を重ねることを止めることです。そして、あなたのために来られた救い主を受け入れることです。あなたはこの方を受け入れませんか？そして、新しいいのちを今日神からいただきませんか？あなたがその正しい選択をして生まれ変わることを心からお勧めします。